断片

世界観

・現代の設定

・主人公は記憶の研究をしている。

・主人公は男であり、息子がいる。妻は行方不明。

・宗教団体「ドミナートル」なる物が存在していて、彼らは「神は自分たちである。」と主張している。表向きには活動しておらず、彼らの存在を知る物はほとんどいない。

主人公

・真面目で優しい性格で、争いごとや賭け事などは好まない。

・記憶の研修をしており、記憶の改変を可能にできる知識と技術をもっている。

・口調は少し強め、怒っているわけではない。

教祖

・ドミナートルの教祖。普段は姿を見せることはないが、Aとはよく面会しているらしい。変声期を使っており、この人物の性別などは不明である。記憶の改変をしドミナートルを世界の共通宗教にしようとしている。

A

・ドミナートルの重要幹部。主人公との連絡役であり、教祖の育て親でもある。基本的には教祖に従順であり、愛している。

主人公の息子

・主人公の息子であり、世界各地にボランティアで飛び回っている。

あらすじ

かつての宗教世界大戦から100年のときが経過しようとしていた。ときおり小さな争いは起こるが世界大戦時の面影はもうない。宗教の自由化も進み人々は平和と自由の道を歩みつづけているのだ。そんな平和な世界で一人記憶の研究をする男がいた。その研究者は記憶操作による精神的病の治療を目的としており、彼の技術や知識は世界からも認められつつあった。しかし記憶の操作というのは決して好まれるものではない。各団体や他の研究者たちからは批判の声が相次いだ。それでも彼は研究を辞めるということはしない。世界のどこかで困っている人がいるなら手を差し伸べてあげたい、そう思っているからだ。そんな彼にある団体から力を貸してほしいという旨のメールが届いた。その団体は「ドミナートル」と名乗る宗教団体のようだ。彼は怪しいと思いながら承諾するのであった。

始まり

じめじめと湿った空、夏の訪れをささやくように火照る地。今は7月だというのにどうも梅雨が抜けきっていない。ましてや湿気が強くなっているのではないかと思わせるくらいだ。しかも暑い、暑い、とても暑い。仕事をすっぽかしたくなる天気。しかしそんな弱音を吐いている暇はない。今日も今日とて仕事、研究だ。いつものように朝8時に起きて、食事、洗顔、着替えを済ませ職場へ向かう、私の職場・・・そう研究室へ。